

大阪工業大学 学生員 ○岡坂 真由美
大阪工業大学 学生員 棚中 正弥
大阪工業大学 正会員 岩崎 義一

1. 背景・目的

日本は 1950 年代からの高度経済成長により都市に産業や人口が集積、宅地や商工業施設等の都市的土地利用が進んだ。高度成長期以降も都市化は進み、都市の緑が減少している。昨今、これに対し大阪市は緑化推進事業、街路における植樹帯の整備を進めている。しかし、飼われた自然ともいえるべき都市の緑、植樹帯を健全に維持する為には日常的なケアが必要不可欠である。事実、市の管理だけではケアが不十分で地域住民が自分達の手で雑草や落ち葉の掃除をする姿も多々見受けられる。

今日の大阪市は人口微増の状態にあり、世帯数の増加、一世帯当たりの人員は減少傾向にある。家族形態の変化に伴いマンション等の共同住宅の需要が増え、戸建ての庭はほとんど見られなくなった。現在、個人生活の場やオープンスペースなどに大小さまざまな庭が存在する。庭は昔から私たちの暮らしに自然の恵みを与え、私たちが緑を結び付けていた。個人生活の場における庭が消えつつある今、人々はどうかかわっているのか。

本研究では最も身近に存在する街路樹や植樹帯（以下、植樹帯）に着目し、これに対して住民はどのような認識を持ち、かかわっているのかを明らかにする。これによって、植樹帯における役割とコミュニティガーデンとしての機能をみるのが本研究の目的である。

2. 調査研究方法

1) 文献調査：大阪市の「植樹帯の敷設路線」と「都市計画用途地域」を把握し、調査地区選定の参考とした。

2) 調査地区の選定：住民の植樹帯とのかかわりが把握しやすい地区として、植樹帯が多く敷設している既成住宅市街地（大阪市旭区高殿、中宮）を対象とした。

3) 住民への意識調査の実施：

上記の 2 地区で街頭 59 件、自宅訪問 54 件のアンケート調査を行った。アンケートの内容を表 2-1 に示す。（実施日、2008 年 12 月 16 日～20 日）

表2-1アンケート内容

①個人属性
性別、年齢、職業、住居タイプ
近所付き合いの程度
②身近な植樹帯への関与
場所、かかわり方、頻度
③植樹帯に対する意識
みどりの必要性、必要・不要の理由、不満
不快と感じる植樹帯、維持管理の満足度
④住民参加型の維持管理活動
活動による効果、活動への参加意思
隣人・地域住民との付き合いの深まり

4) アンケート分析：分析により住民の植樹帯への意識とかかわり、植樹帯が果たす役割を確認する。数量化Ⅱ類分析、コレスポネンズ分析を使用した。

3. 植樹帯の維持管理の現状と役割

1) 維持管理の現状：住民は植樹帯が十分に維持管理されていないと考えている。植樹帯が「ポイ捨て・犬の糞尿」「雑草・落ち葉」といった問題を招いていることが住民に不快感を与えていると考えられる。

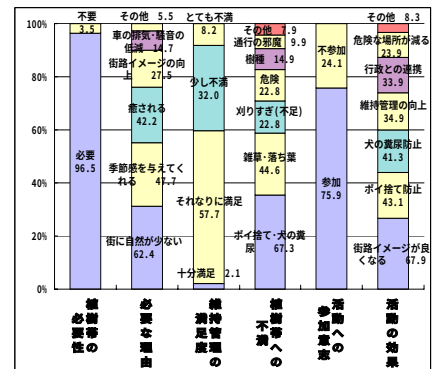


図3-1 住民の植樹帯への意識

2) 役割：図 3-1 より、多くの住民が「街に自然が少ない」「癒される」などを理由に植樹帯を必要としている。住民は植樹帯に自然としての役割を求めている。また、植樹帯のコミュニティガーデンへ活用（以下、活動）に関して住民の参加意志は高い。その効果として住民が抱く植樹帯への不満が解決されると予測される。

4. 植樹帯へのかかわり方の現状

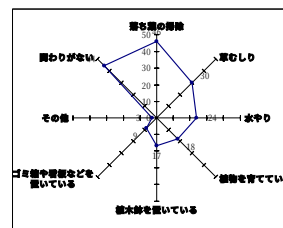


図4-1 植樹帯へのかかわり方

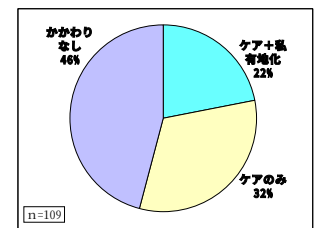


図4-2 かかわりタイプの構成比

住民の植樹帯へのかかわり方を図 4-1 に示す。

図 4-1 より、住民の手によって「落ち葉の掃除」や「水やり」などの日常的なケアがなされている。さらに「植物を育てている」など、植樹帯の私有地化が目立つ。アンケート結果より、住民の植樹帯へのかかわり方を A タイプ「ケア+私有地化」・B タイプ「ケアのみ」・C タイプ「かかわりがない」の 3 つ分類することが出来た。図 4-2 より、植樹帯とかかわりを持つ住民は全体の 50%を超えている。

5. かかわりタイプとその特性

1) タイプと近所付き合い：住民の植樹帯へのかかわりタイプによる近所付き合い特性の評価を行った。コレスポンデンス分析による結果を図5-1に示す。

A タイプの近所付き合いは「一緒に遠出をする」の傾向がある。B タイプは「話・行き来をする」の傾向がある。C タイプには「付き合いがない」「挨拶をする程度」の傾向が強い。

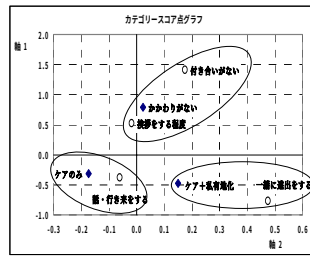


図5-1 かかわりタイプと近所付き合い

2) タイプに影響する要因の分析：住民の属性や身近と認識している植樹帯の場所がどのように影響しているのか分析を行った。分析結果を図5-2、図5-3に示す。

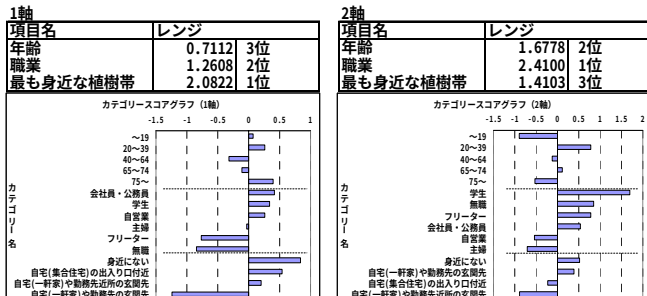


図5-2 レンジ表とカテゴリースコアグラフ

レンジ値とカテゴリーの符号などから判断して、1軸（縦軸）は植樹帯との空間的要因を含む『植樹帯との親近度』を意味していると考えられる。この軸によって、Aタイプとその他が明瞭に分類される傾向にある。

図5-3より、植樹帯との親近度はAタイプが最も高く、続いてBタイプ、Cタイプの順になっている。また、2軸（横軸）についてはレンジ値が全体的に大きいなど、総合的に関係する要因と考えることができるが評価は難しい。

6. 緑へのかかわりにみる空間的特性

住民の緑とのかかわりによる空間的特性を見るため、身近に認識する「植樹帯の場所」、私有地内で「ガーデニングをしている・していない」の特性が明確な自宅訪問アンケート54件について、分布図を作成した。調査2地区の分布を図5-4に示す。

1) タイプと身近に認識する植樹帯：かかわりタイプは自宅と植樹帯との距離が遠くなるほどAからB、Bから

Cと分布する傾向が見られる。この結果は前項で行った数量化Ⅱ類分析と同様の結果であった。2) タイプと私有地内におけるガーデニング：分布図よりガーデニングをしている住民は植樹帯と距離がある場合でもAタイプの傾向がみられる。ガーデニング

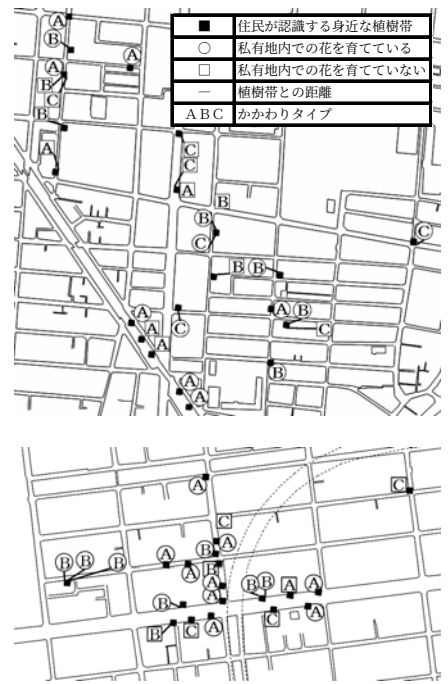


図5-4 高殿（上）、中宮（下）におけるかかわりタイプの分布

をする住民は緑とのかかわろうとする意識が高く、必然的に私有地内を超えて植樹帯に「植物を育てる」「植木鉢を置く」などの私有地化をしていると考えられる。

7. 総括

1) 植樹帯の現状：植樹帯は自然が少なくなった都市に潤いを、住民に安らぎを与えている。住民は植樹帯からの自然の恵みを意識し、必要としている。住民の中には住空間を延長して、植樹帯を自分の庭のように利用する人も多く見受けられる。市による維持管理が行われているなか、住民の手で街の緑を維持しようとする住民も多く存在する。また、住民の植樹帯とのかかわりは近所付き合いに影響していると考えられ、植樹帯はコミュニティガーデンとしての機能を持つと推測される。

2) 今後の植樹帯のあり方：庭のない家庭に植樹帯という新しい形の庭を提供する。植樹帯をコミュニティガーデンとして活用し、住民の手によって緑を育てていく。強いては、植樹帯という空間が隣人とのコミュニケーションの場となる。公共の街路が住居の庭となり、ただ通りすぎるだけの街路が住民の暮らしの空間となる。暮らしの空間が街路にまで広がることで、住民に「街に住む」という意識が高まる。コミュニティ意識の高い街の形成が可能と考えることができる。

【参考文献】

- 1) 大阪市ゆとりみどり振興局『街路樹の景観向上に向けた路線別樹種選定』
- 2) 進士五十八『ボランティア時代の緑のまちづくり環境共生都市の実践』
- 3) 越川秀治『コミュニティガーデン市民が進める緑のまちづくり』
- 4) 官民朗『すぐわかるアンケートデータの分析』